

南あわじ市 活性化委員会が22年度報告と提案



▲16人の委員を代表して中田市長に提案書を手渡す木田薫委員長(左)

昨年3月に市から委託を受けて「市の活性化」に向けた各種協議や実践活動を進めてきた「南あわじ市活性化委員会」が、5月25日、中田市長に22年度の活動報告と提案を行いました。

の姿とは、「市に暮らす全ての人が、自らの役割や仕事があつて、健康で生涯現役で暮らせるようなまちである」として、今後も、まちの活性化に関する構想やアイデアを検討して、市へ提案していく。また、多くの市民が参加して意見交換できる機会の「夢を形にする広場」を開催したり、活性化を担う人材発掘とリーダー育成を進める。さらに、近く支援・協働の組織としての「NPO法人」を発足させるなどの報告を行いました。

旭日双光章を受章



▲乙井勝次さん

春の叙勲で、乙井勝次さん(賀集)が旭日双光章を受章されました。発令は4月29日。乙井さんは昭和46年から旧

乙井勝次さん

南淡町議会議員として、市議会議員も含め30年4か月の永きにわたり、地方自治の発展に多大な貢献をされました。町文教厚生常任委員長として福祉、教育の環境整備に取り組み、市の総合防災対策特別委員長も務められ、防災整備の拡充など安全・安心のまちづくりに尽力されました。

トライやる・ウィーク



▲子育て学習支援センターで子どもとふれあう生徒



▲農園や保育園で体験学習をする生徒たち

生徒らにとつては、保育園で園児への絵本の読み聞かせや、農園での野菜の収穫・出荷作業など5日間で様々な体験を通じて働くことの厳しさや大切さ、やりがいなどを知る良い機会となりました。

表彰 中嶋長史さん

中嶋長史さんが、長年にわたり人権擁護委員として人権問題についての相談や人権思想の普及活動に貢献されたとして、全国人権擁護委員連合会長から表彰を受けました。人権擁護委員は、地域の人々からの人権に関する相談を受けたり、人権への理解を深めてもらうための啓発活動などに取り組んでいます。

義援金

市と社会福祉協議会では、東日本大震災の被災地復興支援のため義援金を受け付けています。

- 個人・団体 309件 1811万3087円
 - ②義援金箱 161件 472万2946円
- 義援金総額※6月21日現在 2283万6033円
- ☎ 44・3007

淡路島たまねぎ収穫体験ツアー



▲収穫のたまねぎを手にするツアー参加者。「わいず倶楽部」は55歳以上の人が集う会員制の組織です。

として歴史資源を活かした歴史のまちづくり事業の実施
▼たまねぎ小屋の風景などを活用した景観のまちづくりや地域の素材を使った事業展開
▼音楽祭の開催などで、地元出身の音楽家の活動基盤づくりや音楽を使ったまちづくり
▼災害時やまちの活性化に貢献する防災ラジオ局(FM局)の開設
▼若手農業者と行政との定期的な意見交換会の実施
▼高齢者や障害者にも働く場を創出するソーシャルファーム
▼これまで開催した農業や海のフォーラムの内容を発展させた実践活動
▼事業化に向けた「ネット試験販売」の継続
▼活性化に関する市民との意見交換や研修と学習の場づくり
この報告と提案を受けて、「市民主体のまちづくり」「まちづくりは人づくり」を推進し実践する市として、中田市長は、「課題も多い社会情勢のなかで、行政だけで物事を進められる状況ではなくなってきた。多くの市民の方々の知恵や協力があつてこそまちづくりができるし、そのような人達が地域のリーダーとなって取り組んでいただくことが大きな要素となる。すぐにでも取り組むもの、調整して取り組むものなどを吟味して、この提案を積極的に受けとめ、行政としても、みなさんとともに、汗をかいていきたい」と応えました。

賀集高秋地区で5月19日、新たな農業経営を模索する地

「ふれあい市長室」大震災に備え「命を守る」行動に全力を

南あわじ市長 中田勝久

先月号で東日本大震災の被災地「南三陸町」訪問について触れました。佐藤町長から「津波警報・注意報が発表されたら、まず高台に逃げる。日頃から実践訓練を行い、避難路や避難場所など、自分自身の頭と身体に十分覚え込ませておく」と熱くご指導いただきました。

合併後「防災対策」を最重要施策として進めておりますが、もう一度検証し直し、避難路の再整備調査や現地対策本部の再考、津波避難マニュアルの作成と併せて、防災計画やハザードマップの見直しを行います。また、災害発生時に大きな役割を担う消防団、自治会、自主防災組織、自衛隊、警察、医療機関、生活資料調達業者などとの連携強化を行うとともに、各団体組織内での行動計画など再点検をお願いしていきます。特に自主防災組織の役割が重要ですので、再度議論・検証を重ねていただく事をお願いします。

一方、早期に学校耐震化

元農家と地域の特色を活かした集客を計画する観光施設の休暇村南淡路(福良)、そして、読売新聞「わいず倶楽部」の3者がタイアップした「淡路島たまねぎ収穫体験ツアー」が行われました。京阪神からツアーに参加した44人の同倶楽部のメンバーが、地元の営農研究会リーダーの土居利幸さんの指導で収穫体験を楽しみました。参加者中37人は、昨年11月に定植体験ツアーにも参加した人々で「収穫もぜひ、体験したい」との希望

長は、「課題も多い社会情勢のなかで、行政だけで物事を進められる状況ではなくなってきた。多くの市民の方々の知恵や協力があつてこそまちづくりができるし、そのような人達が地域のリーダーとなって取り組んでいただくことが大きな要素となる。すぐにでも取り組むもの、調整して取り組むものなどを吟味して、この提案を積極的に受けとめ、行政としても、みなさんとともに、汗をかいていきたい」と応えました。



▲市役所部長次会で被災状況や今後の支援について話す中田市長(5月31日)

組織などとの対応手法や連絡方法、逸れた時の集会所など確認しておく。
準備では、防災訓練に真剣に参加する。通帳や印鑑など大切なものや懐中電灯・ラジオ・水など災害必需品の備蓄や常に持ち出せる位置に置いておく。家具の固定を行い、市が補助している耐震診断や耐震化(例えば寝室をシェルター化する)、フェニックス共済への積極的な加入などを行う。
市民の皆様におかれましては、是非とも災害時に全ての「命を守る」ため、一人ひとりが自覚を持ち、それぞれの役割を全ういただきますようお願い申し上げます。